

---

笑顔の鷹見泉石像稿をめぐる ― 渡辺崋山の肖像画再考 ―

常葉学園大学 日比野 秀男

---

「笑顔の鷹見泉石像稿」と名づけた作品は、これまで「笑顔武士像稿」として知られてきた作品である。この作品の制作年と像主については画面右上にある「天保丁酉四月朔四日 初稿第一」という識語と袴の家紋によって推定されているが、明確な像主は不明のままできた。私は今回、国宝・鷹見泉石像（東京国立博物館蔵）の画稿であろうと考え、「笑顔の鷹見泉石像稿」としたが、その根拠は顔の骨格、口鼻耳などの形態的な類似と口元の黒子などから改めて鷹見泉石像の画稿であろうと推定したのである。しかしながら家紋が鷹見家のものと異なるという問題については解決されていない。ここで発表したい内容はこれまで渡辺崋山の肖像画は完成作に見られる陰影法を用いた写実的な描法、実際の人物を目前にして描いた人物素描に高い評価はなされてきたが、崋山の残した肖像画には本図のような笑顔や死に顔のものがあり、これらについて別の視点から評価しなおす必要があるのではないかという点である。

崋山の肖像画の始まりは文政9年（1826）、崋山29歳のときに制作した「佐藤一斎像」である。この作品には比較的多数の画稿が残されている。言わばこれまでの崋山の肖像画について論じられてきたことは、この佐藤一斎像の制作に関することだけにとどまっていたに過ぎない。それは、その後に残している笑顔、死に顔を描いた一連の作品についての評価を論じてきていないことである。崋山の笑顔を描いた作例としては前述した「笑顔の鷹見泉石像稿」（天保8年・1837）のほか「松崎慊堂像稿」（文政9年・1826）などがある。これらはいずれも画稿であり完成作ではない。また『慊堂日歴』に見られるとおり肖像画の正本の準備のため何度もスケッチを重ねることによりなされたのである。

笑顔とともに死に顔の肖像画もあることも注目すべきことである。無論、死に顔そのものの完成作があるのではなく死に顔をスケッチして生前の肖像画を制作したのである。作例としては実父の死に顔から制作した「渡辺巴州像」（文政7年・1824）、戯作者・滝沢馬琴の令息・琴嶺を描いた「滝沢琴嶺像」（天保7年・1836）がある。いずれも崋山の死に顔からの肖像画は像主が亡くなる前から崋山と近しく交際した人物であり一人は実父でもある。ここに見る笑顔、死に顔のいずれの像主も崋山にとってはごく近い人物である。笑顔は正しくモデルと画家とが厚い信頼関係の中から生まれるものである。

笑顔の肖像画としては谷文晁筆「木村兼葭堂像」が良く知られているが必ずしも多くはない。また、崋山の「校書図」はごく近い女性のくつろいだ姿を描いたものであり、私的なスナップショットのようなものである。これらの作例を交えつつ、改めて崋山の肖像画の特異性について論じることとしたい。